

攻撃的方略と対人的交渉方略過程の関連

境 泉 洋

本研究の目的は、暴力欲求および攻撃的方略と対人的葛藤場面における社会的問題解決過程である INS 過程の関連を検討することであった。

本研究では19名の男子大学生を対象に、友人からの挑発場面における INS 過程について個人面接が行われた。

本研究の結果、暴力欲求および攻撃的方略は INS 過程とある程度関連していることが明らかにされた。具体的には、(1) 暴力欲求高群は暴力欲求低群よりも、結果の評価における社会的視点調整能力が高い傾向がある、(2) 攻撃群は非攻撃群よりも、代替方略の生成と障害後の方略における社会的視点調整能力が低い、(3) 非攻撃群の中で暴力欲求の低い人はその他の群と比較して、代替方略における社会的視点調整能力が高いことが明らかにされた。

考察において暴力欲求および攻撃的方略と INS 過程の関連について議論された。

キーワード：INS 過程、攻撃的方略、暴力欲求、男子大学生

【問題と目的】

犯罪白書（法務省法務総合研究所，1998）によると、少年非行の送致件数は1983年から減少に転じていたが、1996年を境に増加傾向となっている。少年非行の増加するなかで、傷害、暴行、強盗などを伴う粗暴非行は、被害者に与える影響の大きさから注目されることが多い（濱・山森・友廣・藤・大橋・小西・深澤・加藤，1998）。このような状況において、粗暴非行の特徴である攻撃行動の生起するメカニズムを解明することには意義があると言える。

攻撃行動を含む社会的に不適応な行動を行う人と行わない人の間には、対人場面を社会的問題と捉えたとき、その問題を解決する過程（社会的問題解決過程）に違いがあることが明らかにされている。例えば、対人場面において攻撃行動を行う人は、相手の意図を敵意的に解釈すること（Dodge & Frame, 1982）、社会的に適応していない人は、適応している人よりも不適応な行動を対処行動として想起する傾向のある（Rubin & Daniels-Beirness, 1983）ことなどが指摘されている。

しかし、こうした研究の結果に基づいて確立された社会的不適応の改善のため

の介入は、必ずしも一貫して肯定的な結果を示さなかった（渡部・杉原，1994）。また、そうした介入は、攻撃行動を行う人が相手の意図を敵意的に解釈する傾向を改善させるが、社会的問題解決過程全体を改善させないことが報告されるようになった（Weissberg, 1985）。

Schultz, Yeates, & Selman (1989) は、それまで行われてきた介入が社会的問題解決過程の一部しか改善できない原因を考察し、社会的問題解決過程全体を改善するために考慮すべき3つの基準を提唱した。第1の基準は、これまで個人の社会的適応は状況によって異なっており状況特異的であるといわれているため（Dodge, 1985）、社会的問題解決過程を調査する状況を特定する必要があるというものである。そして社会的問題解決過程を調査する状況は、その状況で適切な行動を行うことが、日常生活における社会的適応を予測するような状況でなければならないとした。第2の基準は、社会的問題解決過程を構成する具体的な認知内容を明らかにする必要があるというものである。そして、第3の基準は、社会的問題解決過程の発達の特徴を明らかにする必要があるというものである。なお、ここでいう発達とは、概して個人の年齢に伴って成熟するもの（Schultz et al., 1989）であるが、介入によって向上したり（Selman & Schultz, 1990）、場面やその時の感情の違いによって変化する（渡部，1995）、比較的可変性の強いものである。

Schultz et al. (1989) は、それまで行われてきた介入が社会的問題解決過程の一部しか改善できない原因についての考察を受けて、調査状況を対人的交渉場面に特定した。その理由は、対人的交渉場面において適切な行動をとることが、日常生活におけるその人の社会的適応を予測するとされているからである。また、対人的葛藤場面における行動を媒介する社会的問題解決過程に、問題の定義（STEP 1）、方略の生成（STEP 2）、方略の決定（STEP 3）、結果の評価（STEP 4）という4つのSTEPが介在しているとした（Fig. 1）。そして、社会的問題解決過程の発達に関して、自己と他者の視点の違いを認識する能力とされる社会的視点調整能力の観点から、各STEPの中に自己中心的で自他の視点が分化していない「レベル0」、自他の視点は分化しているが自己の視点から問題の解釈を行う「レベル1」、自己を省みることによって相手の立場を考慮し自他ともに有利な結果が得られるように問題を互恵的に捉える「レベル2」、第三者的視点から自他相互の目標を協調させる「レベル3」を設定した（Schultz et al., 1989: Table 1）。Schultz et al. (1989) は、こうした3つの基準を満たす社会的問題解決過程のモデルとして「対人的交渉方略（Interpersonal Negotiation Strategy：以下、

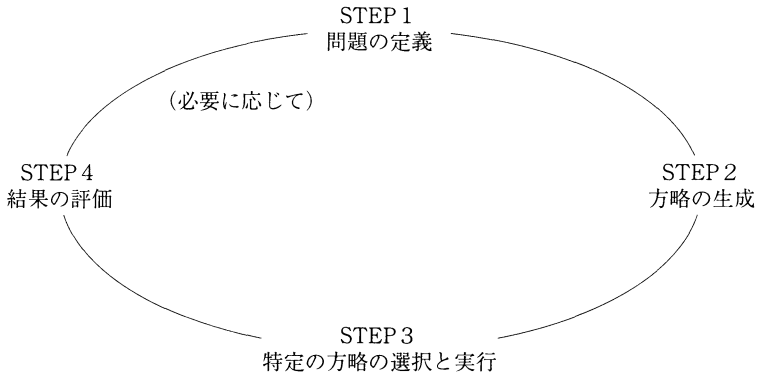


Figure 1 INS 過程における機能的ステップ (Schultz et al., 1989)

Table 1 社会的視点調整能力の4つのレベル (Schultz et al., 1989)

レベル0：自己中心および未分化

レベル0では、人の身体的精神的な特徴がはっきりと区別されていない。客観的／身体的と主観的／精神的な特徴の間にある混乱が、行為と感情、無意図的行為と意図的行為を区別するのに失敗するときに見られる。主観的展望は区別されていないので、相手が同じ行動について異なった解釈をする可能性を認めるのが困難である。

レベル1：主観的および一方的

レベル0からレベル1に進むのに鍵となる概念は、人の身体的特徴と心理的特徴の明確な分化である。人は特有で、主観的で、人から見えないような心理的な営みを持っている。しかし、他人の主観的な状態は直接見えるものであると考える。さらに、視点の関係は一方的に一人の視点から、またその人への社会的相互作用の影響という観点からのみなされる。

レベル2：自己反省的および互恵的

レベル1と比べて大きな概念的進歩は心的に自分自身の外に出て思考や行為について第2の人の観点を取ることができる能力であり、また他者もまたそうできるのだという認識を持つことである。自分自身の思考や感情とは逆の行為を他者は行うことがあるということが理解される。視点間の違いは相対的になる。互恵性が生じ、互いに関係づけはされないものの、自他双方の視点が評価される。

レベル3：第三者的および相互的

レベル3はその人が自分自身の直接的な視点ばかりでなく、実際にシステムとしての自己の外に踏み出すことができるようになる点でレベル2より進んでいる。彼らは真の意味での第三者の視点をもてるようになる。自己は、他者がそうであると同じように、行為者と目的の双方からみられる。関係性への視点は同時に自己や他者の視点を含み、また調整し、システムは一般的な視点から見られる。互恵的な視点は単に認識されるだけではなく、相互の調整の欲求の中に存在するものと見なされる。

INS) 過程」モデルを提唱した。

これまで、INS 過程が社会的適応と関連していることや、社会的視点調整能力の発達を促すことが社会的不適応を改善するのに有効であることが明らかにされている。山岸 (1997) は児童における対人的交渉方略と社会的適応との関連を検討し、INS 過程の発達が進んでいる人は、相手の立場を考慮し、相互に肯定的な結果が得られるような方略を実行するため、INS 過程の発達が進んでいない人よりも適応的であることを明らかにした。また渡部 (1995) は、人気の高い児童が人気の低い児童に比べて INS 過程の発達が進んでいることを報告している。そして、Selman & Schultz (1990) は対人関係に困難を持つ 2 人の子どもの相互作用にセラピストが介入するペア・セラピー (pair therapy) という試みを行い、対象者の自己と他者の視点を調整する能力 (社会的視点調整能力) を高めることで対人関係上の困難を軽減することに成功している。このように、INS 過程の発達が児童・青年の社会的適応と関連していることが示され、臨床の領域においても社会的視点調整能力の発達を促すことが社会的不適応を改善することが明らかにされている。

このように、INS 過程は社会適応の促進を考えるために有用なモデルであり、攻撃行動などを含む社会的不適応に介入する際に、INS 過程は有効なガイドラインになると考えられるが (渡部・杉原, 1994), これまで INS 過程と攻撃行動の関連を検討した研究はない。そこで、本研究では、攻撃行動を行う人の INS 過程と行わない人の INS 過程の間に違いがみられるか検討することを目的とする。

一方、小林・高橋 (1987, 1988) が、暴力欲求の発現が暴力行動を引き起こされる一つの要因であるとしているように、暴力欲求も INS 過程と同様に攻撃行動の遂行に関わる要因として考慮する必要がある。山崎・坂井・曾我・大芦・島井・大竹 (2001) は攻撃行動を怒り感情を伴って遂行される反応的攻撃行動と、目的を達成するために遂行される道具的攻撃行動に分類している。こうした反応的攻撃と道具的攻撃の違いは、暴力欲求と INS 過程を同時に検討することで明らかにされるのではないかと考えられる。例えば、暴力欲求が高い場合に遂行される攻撃行動は反応的攻撃であるが、暴力欲求が低くても攻撃行動を遂行しない人は INS 過程が高いレベルにあると考えられる。また、暴力欲求が低い場合に遂行される攻撃行動が道具的攻撃行動であると考えられる。このことから、攻撃行動の遂行に関連する要因として暴力欲求と INS 過程を同時に検討する必要があると言える。以上のことを踏まえ、本研究では暴力欲求の高さ及び攻撃行動の遂行の有無と INS 過程の関連について検討する。

なお、攻撃行動の上位概念である攻撃性が、怒り、敵意、攻撃行動によって構成される複合的概念（安藤，2002）であることを踏まえると、小林・高橋（1987，1988）における暴力欲求とは、怒り・敵意を含んだ暴力行動の遂行を促進する心理的特性であると定義するのが妥当であると考えられる。そこで本研究では暴力欲求を、「怒り・敵意を含んだ暴力行動の遂行を促進する心理的特性」と定義して研究を進めることとする。

【方 法】

1. 調査場面の作成

攻撃行動と社会的問題解決過程の関連を検討した従来の研究においては、攻撃行動を行う人と行わない人の社会的問題解決過程に顕著な違いを見ることのできる挑発者の意図の曖昧な場面が多く用いられてきた（Crick & Dodge, 1994）。また、これまでINS過程を扱った研究（Schultz et al., 1989；長峰，1996；長峰，1999など）においては、Schultz et al. (1989) の手続きにならって、文章による場面提示が行われてきた。しかし文章による提示では、相手の表情や声の調子などが対象者に伝わらないという問題点がある。より現実に近い状況を再現するためには、ビデオによる場面提示が適切であると考えられる。そこで、挑発者の意図が曖昧な場면을ビデオによって作成した。

まず、首都圏の私立大学に在籍する学生25名（男子10名，女子15）を対象にビデオ視聴の後、質問紙調査を行った。用いられた場面は、主人公が同級生に廊下でぶつかられ、しりもちをついてしまったところに、ぶつかってきた同級生から「ばーか、どこみてんだよ」と言われる場面（以下、調査場面）である。調査場面の作成にあたっては、挑発者の意図が曖昧になるように、出演者は笑顔で挑発行為を行った。そして、被験者は調査場면을視聴した後で、「友人はむかついてあんな事を言った」、「友人は冗談であんな事を言った」という挑発者の意図に関する質問に5段階（1：全くそう思わない～5：その通りだと思う）で評定を求められた。

調査場面において挑発者の意図が曖昧であるかどうかを検討するために、「友人はむかついてあんな事を言った」、「友人は冗談であんな事を言った」に対する評定に偏りが無いか検討した。すなわち、「友人はむかついてあんな事を言った」という質問に対して、多くの被験者が5段階評定の1（「全くそう思わない」）に評定していれば、挑発者の意図はむかついていないと判断され、意図が曖昧でな

いとみなされる。1～5と評定した人数が均等であるか適合性検定を用いて検討した結果、「友人はむかついてあんな事を言った」、「友人は冗談であんな事を言った」の両方において評定に有意な偏りは見られなかった（むかついて： $\chi^2(4)=3.60, n.s.$ ；冗談： $\chi^2(4)=5.20, n.s.$ ）。また、性別によって評定値に差があるか t 検定を用いて検討したところ、有意な差は認められなかった（むかついて： $t(23)=0.51, n.s.$ ；冗談： $t(23)=1.49, n.s.$ ）。以上の結果から、作成された調査場面は、挑発者の意図が曖昧な場面であると言える。

2. 対象者の抽出

学生用暴力欲求質問紙（境, 2005）を首都圏私立大学の男子学生201名を対象に実施し、記入もれや記入ミスを除いた有効回答者194名（平均年齢＝20.53, $SD = 1.93$ ；有効回答率96.25%）をスクリーニング対象とした。学生用暴力欲求質問紙は、学生が日常場面で感じる暴力欲求を測定する尺度で、日常的暴力誘発因子（13項目）、被害因子（3項目）、自己欲求不満因子（4項目）の3因子20項目からなっており、信頼性・妥当性が確認されている（境, 2005）。有効回答者の中から、学生用暴力欲求質問紙全体の合計得点が上位15%の男子10名（暴力欲求高群：平均年齢＝19.80歳, $SD = 1.69$ ）、下位15%の男子9名（暴力欲求低群：平均年齢＝19.67歳, $SD = 1.22$ ）の計19名を抽出した。

3. 手続き

INS 過程の測定は、Schultz et al. (1989) が作成したマニュアルに基づいて個別面接法を実施した。面接を始める前に、面接への参加は任意であるといった面接に参加するにあたっての注意事項を説明した後、調査場面を二度視聴してもらい、その後INS過程の4つのSTEPに含まれている8つの下位項目に関して以下に示す順番で質問がなされた（Table 2）。以下の質問事項は、マニュアルを邦訳し、本実験の面接に先立ち数名を対象に予備実験を行った上で、被験者が質問事項の主旨を理解しやすいように改訂された。

また、各質問の後に必ず「そう考える理由が何かありますか?」と理由を尋ねた。なお、「最良の方略後の感情」はSTEP 4に含まれる下位項目であるが、マニュアルに従い上記の順番で質問を行った。最後に、面接の目的について説明を行い面接を終了した。面接は全て著者が行った。面接時間は一人当たり30分～1時間で、面接内容は概要を文字で記録した。

Table 2 INS 過程 4 STEP に含まれる質問事項

STEP	下位項目	質問事項
STEP 1	問題の定義	この場面の二人のやり取りの中であなたが問題だなあと思うことが何かありますか？
	主人公と他者の感情	この場面であなたと相手の人は具体的にどういう気持ちだと思いますか？
STEP 2	代替方略の生成	この二人のやり取りの中の問題を解決するためにあなたが出来ることは何があると思いますか。思いつくものを全て言って下さい。
STEP 3	最良の方略	この場面の問題を解決するためにあなたが一番いいと思う方法は何だと思いますか？
	解決の障害	あなたがその方法（最良の方略）を実行するのに障害になると思うことが何かありますか？
	障害後の方略	この場面の問題を解決するためにあなたが次にやると思う方法が何かありますか？
STEP 4	最良の方略後の感情	あなたがその方法を実行したら、あなたと相手の人は具体的にどういう気持ちになると思いますか？
	結果の評価	あなたはこの場面の問題が解決できたことをどのようにして判断しますか？

4. 評定および分析方法

INS 過程の 8 下位項目の発達段階を評定するために長峰（1996）が作成した評定基準に基づいて、面接で得られた回答を 0～3 のレベルに評定し、社会的視点調整能力の発達が進んでいると思われる方から 3 点～0 点が与えられ、それを各下位項目の INS 得点とした。また、代替方略の生成における INS 得点に関しては、Spivack & Shure（1974）の研究のように、生成された方略数を得点として用いる手法もあるが、Rubin & Daniels-Beirness（1983）の研究のように生成された方略の質を重視する見解もある。そのため本研究では、代替方略の生成における INS 得点に、生成された方略の平均的な質を反映させるために、先行研究（Selman, Beardslee, Schultz, Krupa, & Podorefsky, 1986；渡部, 1993）においても使用されている生成された方略の平均 INS 得点を用いた。

なお、心理学専攻の大学院生 2 名が独立に評定を行ったところ、評定者間の INS 得点の一致率は「問題の定義」で 94.74%、「主人公と他者の感情」で 84.21%、「代替方略の生成」で 88.41%、「最良の方略」で 84.21%、「最良の方略後の感情」で 94.74%、「解決の障害」で 89.47%、「障害後の方略」で 94.74%、「結

果の評価」で94.74%となり、全体の平均評定者間一致率は90.10%であった。評定者間で評定値が一致しない場合には、著者と評定者の3名による話し合いによって評定値が決定された。著者が加わったのは、著者が評定に最も精通しており面接場面の詳細な情報を理解していると判断されたからである。

【結 果】

1. 暴力欲求の高さと INS 得点の関連

暴力欲求の高さと INS 得点の関連を検討するために、暴力欲求高群の INS 得点と暴力欲求低群の INS 得点を比較した。分散の等質性が保証されなかったため、マンホイットニーの U 検定を行った (Table 3)。Table 3 には各群の代表値として平均順位よりも算術平均値が情報的価値が高いと判断し、算術平均値を記載した。本研究の以後の分析においても各群の INS 得点の代表値として算術平均値を示した。マンホイットニーの U 検定を行った結果、INS 過程の STEP 4 に含まれる「結果の評価」において、暴力欲求高群の INS 得点が暴力欲求低群より高い傾向が見られた ($Z=-1.68, p<.10$)。このことから、暴力欲求の高い人は相手の立場を考慮した視点から問題が解決したかどうかを判断している可能性が示唆された。

Table 3 暴力欲求高群と暴力欲求低群の INS 得点の平均順位

下位項目	暴力欲求高群 (n=10)	暴力欲求低群 (n=9)	Z
問題の定義	9.65	10.39	-30 n.s
主人公と相手の感情	9.15	10.94	-84 n.s
代替方略の生成	8.10	12.11	-157 n.s
最良の方略	8.40	11.78	-147 n.s
解決の障害	9.95	10.06	-.05 n.s
障害発生後の方略	9.30	10.78	-.62 n.s
最良の方略実行後の感情	9.55	10.50	-.42 n.s
結果の評価	12.00	7.78	-1.68 † 高群>低群

† $p<.10$

2. 暴力欲求の高さ、および最良の方略として得られた回答の内容と INS 得点の関連

暴力欲求の高い人の中で攻撃的行動をとる人の INS 過程と、暴力欲求が低い人の中で攻撃的行動をとる人の INS 過程の間には違いのあることが予想される。そこで、暴力欲求の高さおよび「最良の方略」の内容と INS 得点の関連について検討を行った。ここで「最良の方略」を用いたのは、「最良の方略」がその人が現実場面において実際に行う可能性が最も高い方略であると考えたからである。

まず、「最良の方略」に対する回答の内容を攻撃的方略と非攻撃的方略に分類した。その結果、攻撃的方略には「反発する」、「非難を言う」、「怒る」が含まれ、非暴力的方略には「避ける」、「普通に通り過ぎる」、「笑ってすませる」などが含まれていた (Table 4)。この結果から、最良の方略に対する回答として得られた内容には身体的攻撃行動は含まれておらず、言語的攻撃行動、回避行動、無視、適応的行動が含まれていることが分かる。なお、「最良の方略」分類においては各質問事項の後にいった「そう考える理由が何かありますか」という設問に対する回答内容を参考にした。例えば、『「いてーな」と気持ち伝える」という方略は、被験者がその行動をとる理由として、「自分の気持ちを相手にわかってもらいたい」と回答したときには、相手と適応的な手段で交渉する方略と解釈されたため非攻撃的方略に分類された。

Table 4 攻撃的方略と非攻撃的方略の具体例

攻撃的方略	非攻撃的方略
<ul style="list-style-type: none"> ・相手に「なに」とはっきり聞く。 ・言葉で反発する。 ・「なににするんだよ」という感じで怒る。 ・立ち上がって相手を見める。 ・胸ぐらつかんででも「おまえがぶつかってきた」と言う。 ・立って「なんだよ」という感じ。 ・起き上がって「いてーよ」という。 ・相手がひるんだ隙に同じことをやって「どうだ」という。 ・相手に対して結構強い口調で非難を言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・謝って氣勢を削ぐほうにもっていく。 ・自分が避ける。 ・直接注意する。 ・一声かける。 ・「よっ」という感じで挨拶する。 ・先生に話す。 ・笑ってすませる。 ・自分が体をずらして当たらないようにする。 ・様子を見る。 ・自分の行動を振り返る。

次に、暴力欲求の高さと「最良の方略」として得られた回答の内容に従って群が設定された。暴力欲求が高い人の中で最良の方略として攻撃の方略を回答した4名をH攻撃群、非攻撃の方略を回答した6名をH非攻撃群とし、暴力欲求が低い人の中で最良の方略として攻撃の方略を回答した5名をL攻撃群、非攻撃の方略を回答した4名をL非攻撃群とする暴力欲求制御タイプを設定した。

暴力欲求制御タイプとINS得点の関連を検討するために、暴力欲求制御タイプ間でINS得点を比較した。暴力欲求制御タイプ間のINS得点について分散の等質性の検討したところ、分散が等質でなかったため、クラスカル-ウォリス検定を行った (Table 5)。その結果、代替方略の生成において暴力欲求制御タイプ間のINS得点に有意な差が見られた ($\chi^2(3)=10.71, p<.05$)。代替方略の生成に関してマンホイットニーのU検定による多重比較を行った結果、L非攻撃群のINS得点が他の3群のINS得点より有意に高かった ($p<.05$)。また、H非攻撃群のINS得点がH攻撃群よりも有意に高かった。これらの結果から、暴力欲求が低い人の中で非攻撃の方略を最良の方略として選択した人は、その他の人よりも他者の視点を考慮して問題に対処する方略を想起していることが分かる。また、暴力欲求の高い人の中で攻撃的な方略を最良の方略として回答する人は、非攻撃的な方略を回答する人よりも自己中心的な視点から問題に対処する方略を想起していることが分かる。

Table 5 暴力欲求制御タイプ別のINS得点の平均順位

下位項目	H 攻撃群 (n= 4)	H 非攻撃群 (n= 6)	L 攻撃群 (n= 5)	L 非攻撃群 (n= 4)	χ^2
問題の定義	9.75	9.58	7.00	14.63	4.72 <i>n.s</i>
主人公と相手の感情	10.63	8.17	9.60	12.63	2.34 <i>n.s</i>
代替方略の生成	5.00	10.17	8.00	17.25	10.71 * L 非 攻 撃 > H 非 攻 撃, L 攻 撃, H 攻 撃 ; H 非 攻 撃 > H 攻 撃
解決の障害	8.00	11.25	8.40	12.13	2.63 <i>n.s</i>
障害発生後の方略	6.88	10.92	8.60	13.50	3.86 <i>n.s</i>
最良の方略実行後の感情	12.25	7.75	9.10	12.25	3.03 <i>n.s</i>
結果の評価	12.63	11.58	5.80	10.25	4.38 <i>n.s</i>

* $p<.05$

3. 最良の方略として得られた内容と INS 得点の関連

暴力欲求制御タイプ別の人数から、暴力欲求が高い人の中で攻撃的方略を最良の方略として回答した人と非暴力的方略を回答した人の数は、それぞれ4人と6人とほぼ同数であった。このことは、暴力欲求の低い人に関してもそれぞれ5人と4人と同様であった。また、最良の方略として攻撃的方略を回答した被験者9名を攻撃群、非攻撃的方略を回答した10名を非攻撃群とし、攻撃群と非攻撃群の暴力欲求得点を t 検定を用いて比較した結果、両群の間に有意な差はみられなかった ($t(17)=-.25, n.s.$)。これらのことから、暴力欲求の高さは最良の方略として攻撃的方略を選択することには関連はないと言える。そこで、最良の方略として攻撃的方略を回答することと INS 過程の関連を検討を行った。

攻撃群と非攻撃群の INS 得点の分散の等質性が保証されなかったため、攻撃群と非攻撃群の INS 得点をマンホイットニーの U 検定を用いて比較した (Table 6)。攻撃群と非攻撃群の INS 得点を比較した結果、代替方略の生成と障害後の方略において有意な差がみられた (代替方略の生成: $Z=-2.48, p<.05$; 障害後の方略: $Z=-1.74, p<.10$)。攻撃群と非攻撃群の INS 得点の平均順位を比較したところ、代替方略の生成と障害後の方略において非攻撃群の INS 得点が攻撃群よりも有意に高かった。この結果から、最良の方略として攻撃的方略を回答する人は、非攻撃的方略を回答する人と比較して自己中心的な視点から問題を解決するための対処方略を生成しており、また、最良の方略が実行不可能なとき次に実行する対処方略も自己中心的な視点から回答していることが分かる。

Table 6 攻撃群と非攻撃群の INS 得点の平均順位

下位項目	攻撃群 ($n=9$)	非攻撃群 ($n=10$)	Z
問題の定義	8.22	11.60	-1.39 <i>n.s.</i>
主人公と相手の感情	10.06	9.95	-.05 <i>n.s.</i>
代替方略の生成	6.67	13.00	-2.48 *
解決の障害	8.22	11.60	攻撃群 < 非攻撃群 -1.59 <i>n.s.</i>
障害発生後の方略	7.83	11.95	-1.74 †
最良の方略実行後の感情	10.50	9.55	攻撃群 < 非攻撃群 -.42 <i>n.s.</i>
結果の評価	8.83	11.05	-.88 <i>n.s.</i>

† $p<.10$, * $p<.05$

【考 察】

本研究の目的は攻撃行動および暴力欲求と INS 得点の関連を検討することであった。本研究の結果から、(1) 暴力欲求の高い人は相手の立場を考慮した視点から問題が解決したかどうかを判断する傾向がある、(2) 暴力欲求が低い人の中で非攻撃的方略を最良の方略として選択した人は、その他の人よりも他者の視点を考慮して問題に対処する方略を想起している、また、暴力欲求の高い人の中で攻撃的な方略を最良の方略として回答する人は、非攻撃的な方略を回答する人よりも自己中心的な視点から問題に対処する方略を想起している、(3) 攻撃的方略は、INS 過程の「代替方略の生成」、「障害後の方略」と関連していることが明らかにされた。また、暴力欲求の高さと攻撃的方略を最良の方略として回答することは関連していない可能性が示された。

攻撃的方略と INS 過程の比較的強い関連性は、これまでの攻撃行動と社会的問題解決過程の関連を検討した研究と一致している (Dodge & Frame, 1982; Rubin & Daniels-Beirness, 1983)。本研究の結果から、攻撃的方略を最良の方略として回答する人は、自己中心的な視点から問題を解決するための方略を想起したり、最良の方略が実行不可能になったとき次に行う方略を考えていることが明らかにされた。また、有意ではなかったが、ほぼ一貫して攻撃的方略を最良の方略として回答する人の INS 得点は非攻撃的方略を回答する人よりも低い値を示した。このことから、攻撃的行動を行う人は攻撃的行動を行わない人に比べて、社会的視点調整能力の発達が低い段階にある可能性が示唆された。

暴力欲求の高い人は暴力欲求の低い人と比較して、問題が解決したと判断する基準について回答する際に、相手の立場を考慮して回答する傾向のあることが明らかにされた。この結果は、暴力欲求の高い人は喚起された怒りが収まることを問題の解決基準としているために、挑発してきた相手が謝罪するなどの行動をとることを求めているためと解釈される。つまり、暴力欲求の高い人は攻撃行動の遂行にかかわらず、相手の行動・態度の変化を解決の基準として重視しているため、解決の基準に関する INS 得点が高くなったものと考えられる。また、暴力欲求の発現は、暴力行動が引き起こされる一つの要因であるとされてきたが (小林・高橋, 1987; 小林・高橋, 1988)、暴力欲求の高さは最良の方略として攻撃的方略を回答することは関連していないことが明らかにされた。つまり、暴力欲求の発現は必ずしも攻撃行動を引き起こす要因ではないと考えられる。これらの結果は、暴力欲求だけでは攻撃行動の遂行を説明できないことを示唆している

ものと考えられる。

今後、攻撃的方略とINS過程の関連についてさらに検討を進めていく必要がある。そして今後の研究においては、次の点を考慮する必要があると考えられる。Schultz et al. (1989) の作成した面接マニュアルによると、面接において実施される質問は「この場面の二人のやり取りの中であなたが問題だなあと思うことが何かありますか？」から始まり、「あなたはこの場面の問題が解決できたことをどのようにして判断しますか？」で終結する。しかし現実場面において、面接で実施するような一連の社会的問題解決過程に基づいて人が行動しているとは考えにくい。例えば、攻撃行動を行うときには、感情の高ぶりの為に思考過程が短絡的になっている可能性がある。こうした感情が社会的問題解決過程に与える影響については、正負の気分がその人の情報処理に影響を与えるというムード一致効果 (Bower, 1981) からも推測される。また、高い覚醒状態において思考過程が妨害されることにより、合理的に考える能力が低下することや衝動的行動が遂行されるといった認知的機能低下 (cognitive incapacitation; Zillman, 1979) も、情動と思考の関係を示している。こうした、面接場面と実際に攻撃行動を行うと考えられる場面との分離は、今後解決していくべき重要な課題であるといえる。

<付記>

本研究は、2000年度に修士論文「暴力行動の認知的制御過程」として提出されたものに加筆修正を行ったものである。

本調査にご協力いただきました早稲田大学人間科学部の学生にみなさんに感謝申し上げます。また、面接データを評定して頂いた、なごやメンタルクリニックの横山知加先生、吉備国際大学社会福祉学部の松永美希先生、そして論文作成の際御指導いただきました北海道医療大学心理科学部の坂野雄二先生に深くお礼申し上げます。

【文 献】

- 安藤明人 2002 攻撃性概念と測定方法 島井哲志・山崎勝之(編) 攻撃性の行動科学：健康編 ナカニシヤ出版 Pp.35-51.
- Bower, G. H. 1981 Mood and memory. *American Psychologist*, 36(2), 129-148.
- Crick, N. R. & Dodge, K. A. 1994 A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115(1), 74-101.

- Dodge, K. A. & Frame, C. L. 1982 Social cognitive bases and deficits in aggressive boys. *Child Development*, 53(3), 1146-1158.
- Dodge K. A. 1985 Facets of social interaction and the assessment of social competence in children. In B.Schneider, K. H. Rubin, & J. Ledingham(Eds.), *Children's peer relations: Issues in assessment and Intervention* (Pp.3-22). New York: Springer-Verlag.
- 濱 由紀子・山森美智代・友廣信逸・藤 達也・大橋 茂・小西 淳・深澤麻美・加藤貴生 1998 「少年粗暴非行」の要因研究：統計的分析の試み 家庭裁判月報, 52(7), 121-158.
- 法務省法務総合研究所(編) 1998 平成十年度版犯罪白書：少年非行の動向と非行少年の処遇 大蔵省印刷局
- 小林寿一・高橋良彰 1987 暴力に対する中学生の意識・態度の関する研究：1. 暴力欲求の発現要因の構造化 科学警察研究所研究報告犯少年編, 28(1), 15-26.
- 小林寿一・高橋良彰 1988 暴力に対する中学生の意識・態度の関する研究：3. 重回帰分析による暴力規定因の検討 科学警察研究所研究報告犯少年編, 29(2), 129-136.
- 長峰伸治 1996 青年期の対人的交渉方略に関する研究：INSモデルの検討と対人的文脈による効果 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 43, 175-186.
- 長峰伸治 1999 青年の対人葛藤場面における交渉過程に関する研究：対人交渉方略モデルを用いた父子・母子・友人関係での検討 教育心理学研究, 47(2), 218-228.
- Rubin, K. H. & Daniels-Beirness, T. 1983 Concurrent and predictive correlates of sociometric status in kindergarten and grade one children. *Merrill-Palmer Quarterly*, 29, 337-352.
- 境 泉洋 2005 学生用暴力欲求質問紙の作成 志學館大学人間関係学部研究紀要, 26, 49-60.
- Selman, R. L., Beardslee, W., Schultz, L. H., Krupa, M., & Podorefsky, D. 1986 Assessing adolescent interpersonal negotiation strategies: Toward the integration of structural and functional models. *Developmental Psychology*, 22, 450-459.
- Selman, R. L. & Schultz, L. H. 1990 *Making a friend in youth: Developmental theory and pair therapy*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Schultz, L. H., Yeates, K. O., & Selman, R. L. 1989 *The interpersonal negotiation strategies interview manual*. Unpublished scoring manual, Harvard University.
- Spivack, G. & Shure, M. B. 1974 *Social adjustment of young children*. San Fransisco: Jossey-Bass.
- 渡部玲二郎 1993 人気を指標とした対人交渉方略測度の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 5, 49-53.
- 渡部玲二郎・杉原一昭 1994 社会的不適応児への介入に関する INS モデル 筑波大学心理学研究, 16, 155-161.
- 渡部玲二郎 1995 仮想的対人葛藤場面における児童の対人交渉方略に関する研究：年齢、他者との相互作用、及び人気の効果 教育心理学研究, 43(3), 248-255.

- Weissberg, R. P. 1985 Designing effective social problem solving programs for the classroom. In B. Schneider, K. H. Rubin, & J. Ledingham (Eds.), *Children's peer relations: Issues in assessment and training*. (Pp.225-242). New York: Springer-Verlag.
- 山岸明子 1997 児童における対人的交渉方略と適応感、仲間からの評定の関連 順天堂医療短期大学紀要, 8, 32-43.
- 山崎勝之・坂井明子・曾我祥子・大芦 治・島井哲志・大竹恵子 2001 小学生用攻撃性質問紙 (HAQ-C) の下位尺度の再構成と攻撃性概念の構築 鳴門教育大学紀要 (教育科学編), 16, 1-10.
- Zillman, D 1979 *Hostility and aggression*. Hillsdale: Erlbaum.